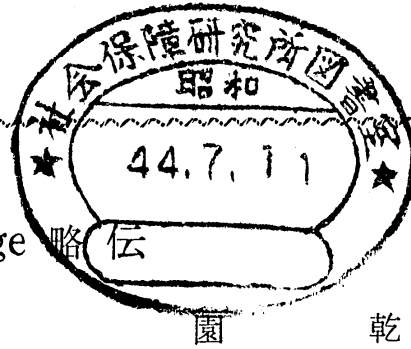




Beveridge 略伝

園 乾 治

社会保障の父 William Henry Beveridge は、今から 90 年前の 1879 年 3 月 5 日、裁判官であった父の任地インドで生れた。そして彼は長ずるに及んで Oxford の Balliol College に学び、1901 年 22 歳でそこを卒業し、弁護士となったが幾許もなく廃業し、Toynbee Hall の副館長となり、下層社会の生活の実態をつぶさに見聞し、景気・雇用・失業救済などの問題に興味を覚えたが、さらに新聞の論説を担当することになって、広く経済・政治・社会の諸問題の研究に情熱を傾けた。それが機縁となって、彼の生涯の活動の方向が定まったのである。

その後 1905 年、彼は商務院に入り、失業保険と職業紹介制度の企画・立案に従事し、また国営保険の施行に必要な諸機構の整備を手掛けたが、第 1 次世界大戦に際会して、軍需工場の労働力の確保・生産力の増強に努め、その後復興省に移り、失業保険の調査、雇用安定の企画などに従事したが、終戦を迎えて官途を辞し、1919 年 10 月 1 日 London School of Economic and Political Science の理事となり、その後 40 歳から 58 歳になるまでの 18 年間その職に在った。

彼が就任した当時の London School は少数の主として兼任教師が夜間学生のために講義するのが本体で、設備ははなはだ貧弱であった。そこで彼はまず建物を増築し、施設を改善すると共に、教師の給与を引き上げ、学生のために研究指導制度を導入し、体育施設を完備し、London School をイギリスにおける最も優れた大きな大学としたのである。そして彼は University of London の評議員を兼ね、後には評議員会の副会長となり、多年の懸案であった本部移転の問題と取り組み、対立した意見を巧みに調整し、Bloomsbury に移すことに成功したのである。

かくして彼は教育の振興に多大の貢献をなしたのであるが、それと前後して、王室炭鉱委員会の委員として、失業保険の適用問題と財政の健全化の問題を解決した。そして 1937 年 Oxford の University College の学長に迎えられ、学園都市の建設に尽力したが、たまたま第 2 次世界大戦に遭遇し、労働調整委員会の会長となって、軍需労働と戦闘兵力の調整を図り、さらに同年末、労働次官となって、労働統制問題を担当したが、1941 年 6 月 1 日、社会保障および国連事業合同委員会の創設に伴い、その会長となり、政府と関係団体の協力を得て、いわゆる *Beveridge Report* を作成したのである。

Beveridge Report は広範な社会保障計画に関する報告書で、その 3 分の 2 は彼が自ら執筆したものであり、政府は 12 月 1 日午後 3 時これを下院に提出し、その夜 9 時 15 分ラジオで放送し、さらに翌日の新聞で報道した。そして彼はたちまちイギリス国中の人気者となり、その名を不朽のものとしたのである。そして彼は 1944 年補欠選挙に自由党から出馬して下院議員となったが、次の総選挙では一敗地にまみれ、彼の議員生活はわずか 6 ヶ月で終わった。しかし、彼の本領はむしろ学者および政府の委員としての活躍に在り、20 数種の著書と無数の報告書と講演および放送などにあったというべきであろう。

なお一言付け加えると、彼は *Beveridge Report* の発表されて間のない 1942 年 12 月 15 日、Jaret (Jessy Philip Mair) と結婚した。彼女は彼の従兄弟の妻で、1942 年 7 月末亡人となったのであるが、それよりも彼女は 1904 年以来仕事の上で、彼と影の形に添うがごとくいつでもどこでも一緒であったし、彼らの結婚は彼らを知るすべての者から祝福されたのである。なお彼は 1919 年 Sir となり、1930 年学位を受け、1946 年 Lord となったが、1963 年 3 月 16 日、84 歳で多彩なその活動に終止符を打ったのである。